

論文の内容の要旨

論文題目 公共図書館の利用と滞在行動に関する研究

氏名 朴 仁圭
パク インキュウ

近年の社会状況の変化、特に情報化時代への突入、余暇時間の増大、モータリゼーションの発達、行動様式の多様化などの影響により、図書館利用者の利用構造は大きく変化しており、図書館の計画やサービスは利用者のニーズを十分に把握した上で、より地域社会に密着した方向が求められる。

最近の公共図書館のサービスや利用の特徴は、地域計画的な視点からは、図書館の相互ネットワーク化及びグローバル化による複数館利用の増大、建築計画的な視点からは、館内長期滞在化に伴う家族利用及び読書外行動の増加が挙げられる。

本研究は、こうした公共図書館の利用構造を明らかにする中、特に図書館を利用する主体である利用者の施設選択及び利用行動、そして施設利用の状態に大きな影響を及ぼす図書館の空間構成状態と利用行為についての考察を行い、今後の公共図書館の建築計画における計画指針を得ることを目的としている。

公共図書館の「いつでも、どこでも、誰でも、どんな資料でも利用できる」という基本理念の実現のためには、図書館の相互ネットワークによるサービスが不可欠であると思われる。本研究の対象地である東京都大田区立図書館においても、1995年10月から貸出館以外の館での返却業務を実施しており、なお、近年には隣接する区間での相互借貸利用が始められている。これは、利用者の目的に合った使い分け行動をもたらすことになり、従来とは異なる利用圏域が形成され、新たな計画課題が提起される。

一方、本の蔵書数が増え雑誌やAV資料も充実する中で、滞在を目的とする図書館も現れ、利用主体や利用形態はかなり変化している。滞在空間の提供及びオープン化は多重資料の利用を可能にすると共に、長時間館内で家族と過ごす利用を増やせ、資料利用と滞在をも考える新たなコーナー配置構成計画が要求されることになる。

本研究はこの2つの観点に先立ち、第1、巨視的な観点から都心部に位置している16館のネットワークされた区立図書館におけるアンケート調査を通じて、複数館利用の状態を把握することによって、利用者の図書館選択行動を明らかにしつつ、第2、微視的な観点から地方都市において定着しつつあ

る滞在図書館を対象に、家族のグループ利用状況に対してコーナー配置構成と過ごし方を中心に考察した。

研究の課題は大きく2つに分けられる。

1つは、区立図書館のネットワーク・システムにおいて、単独館利用と複数館利用の現況を把握しつつ、その使い分け行動構造に着目した利用行動論的考察のアンケート調査からなる。2つ目は、滞在型図書館における家族のグループ利用者を対象に滞行為や場所、滞在時間などを考慮しつつ、館内での過ごし方と空間構成との関係を分析する滞在行动論的考察の追跡観察調査からなる。

まず、第1の課題である利用形態論的考察では、従来の地域施設計画における「近さ」という施設利用の固定化された条件から脱皮した、より普遍的な計画理念の創出を目標とし、利用者の選択・利用行動を中心とする複数館利用の様態から利用型を設定し、利用型の構成と特徴を明らかにする。

第2の滞在行动論的考察は、各図書館のコーナー配置構成の特徴を明らかにしつつ、過ごし方に影響を与えると思われるコーナー配置構成と館内での過ごし方による利用型との関連性を分析することによって、多様な過ごし方を誘発し、整序化しつつ受容する滞在図書館における空間構成のあり方について利用者の過ごし方の実態から明らかにする(1章)。

第2章、来館者の全体像では、

来館累積距離別、来館者属性及び利用交通手段や所要時間別に全体の来館者像を考察した結果、平均来館累積頻度は50%の範囲で半径約0.6km、80%の範囲で約1.2km弱で、平日と休日の広がりとの差はないことと、利用率の高い館に面している館では利用への吸引力が少ないことがみられた。最も大きい利用圏を表している館は、地域中心館である大田図書館(施設のサービスを優先:内容重視型)と区の中心に位置している駅前図書館(近さを優先:距離重視型)、そして、他の館と少し離れているが、館の雰囲気の良い洗足池図書館(館の雰囲気を優先:滞在重視型)であり、利用者の利用目的によって館の複数利用現象が現れている。

全館とも若者は登録率は高いにもかかわらず、現在利用を続けている者はあまり多くないことと、60歳以上の高齢者の利用が登録者率を大きく上回っており50歳代でも登録者率よりも来館者率のほうが高いことから自由になる時間の多い高齢者が活発に図書館を利用していることが分かった。

全図書館での利用者の主体は勤務者男性と主婦で、利用者層の変化がみられた。

利用者にとって身近な位置にある施設とはいえませんが、館によって施設の何らかの原因が作用し遠いところからも訪れる利用者が多いことも確認された。

第3章、図書館の利用形態論的考察からは、

ポロノイ図によって、各図書館を中心に最も近い領域を利用者の居住地とし、大田区の15カ所の図書館について、利用者の館の選択利用状況を中心に考察した結果、アンケート応答者の約42%の人が複数館利用者であり、その様子を把握することができた。

利用者は、居住地に図書館があれば、まずそこを選択している一方で、近くに図書館があるにもかかわらず、他の館を利用している複数図書館利用(MLU)者が多く見られ、図書館の利用圏が復層化していることが分かった。業務・商業地域に位置している図書館では、<SLU:単独図書館利用>型より、<MLU>型が高い割合を占めている。平日には、業務・商業地域での複数利用が盛んに行われる一方、休日では隣接する居域間での相互利用が現れるなど、曜日別の選択利用の差が見られた。その中で、S館とH館は距離や蔵書数のみではなく、別の要因により選択されていることが分かった。これらの複数利用は、利用者の属性により利用目的や選択理由などに大きく異なることが考えられ、来館距離や来館目的などから複数館の利用行動を考察した。

図書館の来館者は勤務者男性と高齢者、主婦が主流で、複数館を選択利用しているのは[有職男性単独]と、[主婦グループ]が多いことが分かった。グループ利用の場合、徒歩と自転車での来館者が圧倒的に多いのは、過去の研究結果と変わらないが、高齢者層のバス利用がやや多くなっていること

や有職男性の車利用が増加したことなどは、モータリゼーションの発達ともいえる。また、家族連れなどのグループ利用の主婦よりも、有職男性単独来館者のほうが広い範囲で複数館を選択利用していることが分かった。施設間の距離が短く、多数の図書館が密集している都心地域での図書館計画を進めるためには、この遠くまで伸びる利用を重要視することが必要である。

<MLU>型の中で高い割合を占めている、有職男性単独と主婦ループは、来館目的も選択理由も相違があるということを示した。

主婦グループは近い図書館を求め、有職男1人と高齢者1人は図書館側が提供するサービスや図書館で過ごすための場や館内の雰囲気の良さに引き寄せられて複数館を選択利用していることが分かった。

このように、有職男性単独のような遠くから訪れている来館者が、蔵書だけではなく館内の雰囲気に影響を受けていることが証明された。

今後の図書館の施設計画では、蔵書数など施設のサービスを考慮することはもちろんのこと、館の[雰囲気づくり]といった遠方からの利用を保す要素も積極的に取り入れ、魅力ある図書館づくりをしていくことが必要であると考えられる。

第4章では、

利用者が図書館滞在において「どこに」、「どのくらい」の時間をかけて過ごしているかを場の<占有形成>の観点から捉え、空間構成の毎の利用傾向を把握した結果、調査館で平均70%を上回る利用者が複数の場所に拠点を置いて過ごしていることが確認された。家族構成において場所占有形成率は子供を2人含む家族構成か、または、親が2人含まれる家族構成で高く現れた。また、複数占有型におけるコーナー利用のバリエーションは空間構成の多様性を反映した結果として、IMLの方でもっと高く現れた。次に、コーナーの利用状況を見ると、隣接型での新聞・雑誌コーナーの利用はあまり見られなく、主に、子供のコーナーを中心として場所占有が形成されているのが見られた一方、両分型では親は成人コーナーを中心に、子供は子供コーナーを中心に場所占有が形成されているのが見られた。

家族利用において子供と親の利用目的を図書利用だけに限定するのではなく、利用行為と場所との相関関係をも含む空間と時間との配列の中で、利用者のパースの形状から利用型を設定し、利用型の構成と特徴および空間構成の型毎の違いを分析した。

読書行為のみを考えると、望ましい利用型は<相互付き添い>利用型と<相互独立>利用型があるが、<相互付き添い>利用型は親が主目的利用をする時間が制約されやすく、また、成人コーナーでは子供の連れ添いと他の成人との軋轢が生じやすい。子供と親の両方の読書利用目的を満たすためには<相互独立>利用型が優れているといえる。

しかし、滞在型図書館では、読書行為だけではなく、非読書行為も多く見られるのが特徴で、<子供主体+親付き添い>利用型と<親主体子供付きまとい>利用型においては、利用者の非読書利用が顕著であることから、非読書行為が読書行為に不和しないような範囲で積極的に取り入れられ、長時間過ごせる環境づくりへの配慮が必要であることを整理した。

第5章のまとめでは、

図書館設置区における利用者は、必ずしもその図書館のみを利用するのではなく、目的に応じて複数の図書館を「選択・利用」していることを整理した。選択利用の主な要因として、【近さ：距離重視型】、【施設のサービス：内容重視型】、【館の雰囲気：滞在重視型】の3つがあるうち、単独館利用者は圧倒的に距離を最優先して図書館を選択しているが、複数館利用者は、距離を選択要因として挙げる割合も高いが、施設のサービスや館の雰囲気が距離を押し下げる要因となる傾向にあることから、今後の図書館施設計画においては、距離だけではなく、蔵書数の増加や滞在しやすい館づくりへの配慮が必要であるとした。

情報の発達と共に、図書館に行かなくてもほしい情報が得られる現状況の中で、これからの図書館は、情報提供の場だけではなく、過ごす場としての位置付けも必要であることを整理した。また、内部観察調査の結果からは、家族、特に親子利用の図書館滞在において、周囲を気遣うことなく、かつ親の意識の中の内的制限を緩和するには、子供コーナーは成人コーナーや読書コーナーから「両分型」の構成が望ましいことを整理した。